



1994年(平成6年)
9月号(No.592)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

合歓北峰・56年ぶりの再訪記……1	報告
マッキンリー気象観測登山隊……3	
第48回ウエストン祭……3	
現地講演会・自然エネルギー利用 実用化の現状……4	
三水会・300回例会……5	
山と医療……5	
支部だより……6	
山形 京都 信濃	
海外の山……7	
東西南北	
再び企業と環境保護……8	
木暮先生追悼小集会和絶筆……8	
自然保護随想……9	
図書紹介……10	
『芦安村史』『西藏漂泊 上・下』 『中国登山指南』『フランシス・キ ングドン・ウォード』『HITLER'S MOUNTAIN TROOPS』	
書籍受入報告……11	
住所変更……11	
新入会員……12	
会務報告……13	
ルーム日誌……14	
INFORMATION……14	
会員異動……15	

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

曾遊の合歓北峰 五十六年ぶりの再訪記

平林秀雄

■中央山脈概観

台湾島は九州ほどの大きさ、南北約三八五キロ。その背骨ともいうべき中央山脈は、北部烏岩角に起こり、南ガランビに終わる約三二〇キロ。その間に三〇〇メートル峰が一〇〇座近くそそり立つ。

北端、南湖山群より二五キロ、南走して合歓山群の結節をつくり、東に九〇度約四五キロ奇萊の山群を起す。さらに南下、秀馬山群の複雑な地形を形作り、南尖、関山と続き、北大武は三〇〇メートル峰の最尾とされる。台湾島は南に三八度傾いているとよくいわれる。大河はすべて南流する。

■合歓北峰

「たったの」のつく北大武山こそがその意味では四〇〇メートルを超す本島第一の高山であるかもしれない。東西縦貫公路(花蓮・天祥・梨山・台中)に旅し、標高二五〇〇メートルの大禹嶺に降り立つ人は、誰しも眼前に優しくも毅然と立ちはだかる山群を仰ぎ見る。タツキリの深い溪谷にその山裾を落とすたまたまい。偉観である。眼前は畢祿山群と合歓山群との連結尾根をつくる大禹嶺トンネル。中央山脈は南北に二つのトンネルを持つ。北部のものがこれであり、南部には大関山トンネルがある。

合歓北峰(三四三メートル)は合歓山群の最雄であり、二等三角点がある。台湾高山十崇の一つであり、松雪楼より石門の險を越え、車で約十五分、一二三里程碑付近がその登山口である。山体は五〇〇万年の粘板岩系、すなわち上部は石板石、下部は粘板岩、硬質砂岩、ところどころ千枚岩がのぞく。可憐な高山植物の花を見せて、取り付きやすく、登りやすい山である。ゆっくり登って二時間、下り一時間、女性的な山容、温もりを感じる山である。一面に短小な矢竹におわれ、亜麻色を呈し、登山道はくっきりと踏まれている。円頂峰でヘリポートにでも利用できそうな地形すら、ところどころにみられる。東に緩、西に急、水成岩体のパターンを示す。主峰、東峰との間は、合歓溪(大甲溪支流)が複雑に入り組む。

山頂はテーブル状、南に延びて四キロ、三一四〇メートル峰を経て西合歓山(三一四四メートル)となる。歩行約五時間。このはるか南空には玉山山群が黒々と山容を誇り、主峰に遮られながらも、秀馬連山もその左に見え、また遠く関山(三六六六メートル)も望みできる時刻があるといわれている。雄大な景観である。

■北峰山頂からの眺望

平成六年四月二十日、我々訪台親善登山隊は合歓北峰の頂きに立った。北峰山頂より北望するに、烏岩角・三星山・清水山等と南に向かい、かけ登りやと三〇〇メートルの稜線にたどり着く。南湖山群、中央尖山の巨影が目をとらえる。中央尖山の鋭峰は天を摩して本島一、左面に一小尖峰を従え、まるで槍と小槍の観を呈する。さらに南して甘薯山(三一五六メートル)の

ずんぐり、無明(三四九メートル)、鈴鳴(三七一メートル)、畢祿山(三七〇メートル)と競い立ち、鋸山の尖峰群は間近である。黒木におおわれた黒色、矢竹の群落の亜麻色、その織りなす山々の力強さ。羊頭山(三〇三

平成六年度「海外登山基金」助成登山計画募集

海外登山基金委員会

平成六年度の海外登山基金による助成登山計画の募集を左記のとおり行います。ふるってご応募ください。

対象 平成七年二月一日～平成八年一月末に出発する登山隊。会員の推薦があれば、隊の規模の大小は問いません。

申込方法 所定の様式(本会事務局に請求してください)に記入し、登山計画書(十五部)を添付して申請してください。

申込締切 平成六年十二月二十日
審査ならびに交付の時期 平成七年一月中に審査を行い、二月の理事会で決定し、二月中旬～三月末までに交付します。

交付金額 二〇〇万円(金利の低下により平成六年度予算計上額より減)です。

三メートル)は姿を見せない。

これら山群の東西には、東西横貫公路が白く光り、山腹をうねって通じる。かつての古道はその右手タツキリの黒い溪谷沿いに没し、姿を見せない。

東方には北流するタツキリ、南流する濁水の源流溪谷を隔て、奇萊山群の山々と対する。奇萊北峰の岩肌の山脈は見る者を威圧する。その南に主峰、さらに南下して能高山群、それ以南は合歡東峰に視界を遮られる。この山域もまた山岳重畳。奇萊北峰(三六〇五メートル)の左に屏風山(三二四八メートル)、その奥にタロコ大山(三二八〇メートル)、タツキリ主山(三〇六九メートル)、ともに八〇〇〇万年～一億年の古さを示す結晶片岩の山体である。さらにその奥深く、タロコ峽右岸の山々のうち、三棧山(二四四〇メートル)、塔山(二四四八メートル)は目立ち、ともに結晶石灰岩、いわゆる大理石の山体を誇る。さらに深く、鈍く輝くのは太平洋。この大観をわが日本に求めることは残念ながら難しからう。

西面はいくつもの支尾根を派生する。右手下方に白く輝く山岳道路を見る。梨山に至る横貫公路と説明されたが、それは支尾根の一つの北側をまわく。こより見ることはできない。トンネルを抜けきってすぐ右に回り込む八二〇林道、畢祿登山道の一部をなすもので

あろう。左に大甲支流の深い溪が黒々とまわりつく。

眼下はるか、白い帯状の台地が展開して見える。これが台湾が誇る山岳農場福寿園である。その北端に梨山(旧サラマオ)の建物が見える。

桃山、南湖大山のコーンビヤナンより南流する大甲溪。その川面は深く大地に刻み込まれ、ここから見ることはかなわない。が、そこには、かのサラマオ鱒、氷河時代の遺存種が今もなお生息する。雪山に発し、武陵農場と環山に流下する二支流にである。台湾では国宝として大切に保護を受けている。

眼前はるか、上空一際高く雪山(三八四メートル)を盟主とし、その南方に展開する大雪山脈、大剣山脈の山々は重厚に横たわる。雪山は巨大な山容である。尖峰ではないが、大きく高い。北面に大雪田をもつこの山は、本島第二の高山、五岳の一名山である。氷河の遺跡に富む。若き頃の故鹿野博士により調査し尽くされた名峰である。雪山は右手へと黒々と一支脈を延ばす。武陵四秀といわれる品田山(三五二九メートル)、池有山(三三〇一メートル)、桃山(三三三四メートル)などの山々である。

雪山山群は山域が最も巨大で、変化に富むもの。昨年雪霸国立公園として

五番目の国立公園に指定された。登山口は今回、日本山岳会隊が登った武陵方面より西進するものと、西面は竹東方面より取り付く大霸山群登山道からの二つがある。

■台湾アルプスの景観

私は十年前、この雪山山頂に立ち、東方に中央山脈の大偉観を目の当たりにし「台湾アルプス」の名を口走った。今回はその逆に東方より西のほうを望み、その命名を当を得たものであると自賛した。合歡北峰より三六〇度のパノラマ景観は、台湾島第一のグラランド・ビューというべきであろう。

八通関登山道の秀馬一帯に車道が完成したとき、今度は南北に展望を競い合う日はあるのだろうか。それはいつのことであろうか。その日のあることを願って止まない。

■追憶

昭和十四年(一九三九年)十二月三十日、私と山友はこの山域を歩いた。合歡山(現昆陽?)石門、合歡(口)(現大禹嶺付近)の三警察官駐在所のチェックを受け、霧社、ダビト(現天祥)間に、十六の駐在所を通過、一〇〇キロを二日半で踏破した。合歡北峰の登頂には予定時間を大きく外し、畢祿駐在所の武装警察官二名の出迎えを受けたことを、懐かしく回想した。

注/筆者は中華民国山岳協会名誉会員

マッキンリー

気象観測機器 設置登山隊一九九五

科学研究委員会

六月四日、登山隊は総勢八名で成田を出発。登山中、悪天候に苦しまれながらも、観測機器の回収、新規設置、および全員登頂を果たし、三十日無事帰国した。

六月六日にカヒルトナ氷河へ入った我々は、最初好天に恵まれ、四三三〇メートルのメディカルキャンプに入る



新規に設置された観測機器

までは順調に隊を進めることができた。はじめの二日間は氷河上をスキーで歩き、三三三〇メートルのデポキャンプからはアイゼンで行動。デポキャンプから先は、高度順化の意味で荷揚げを行い、休養の後、メディカルキャンプへ移動した。

しかし、五二五〇メートルのハイキャンプへ荷揚げが完了した直後の十五日から天候が荒れ、行動できない日が一週間続いた。食料が足りなくなつたため、デポキャンプにデポしておいた下山用食料を回収したが、それでも足りず、四三三〇メートルに残された

食料を約半分に切り詰めて、ひたすら好天を待った。

二十二日、ようやく行動可能となり、深夜ハイキャンプに移動(白夜なので夜でも行動できる)、どうか計画を続行することができた。この日も悪天候だっ

た場合は、食料切れのため下山するつもりであった。

幸い、残りの四日は雪の日もあつたが、大きく崩れることはなく、二十三日午後に設置作業を完了、二十五日に全員で頂上を踏み、無事、目的を果たすことができた。

デナリパス上部の五七一〇メートル地点に設置された観測機器は、風速計(三杯型)が破損していたが、風向計、温度計は外見上機能していた。今回は従来のシステム(風向、風速、気温、気圧を測定)に、新たにプロペラ型風速計、温度計を加えたものを新規設置し、古い機器はすべて回収した。

風速計が破損していたのは非常に残念だったが、昨年一年間のデータがどの程度取れているか、解析結果が楽しみだ。魔の山、冬のマッキンリーの姿が明らかにすることを期待したい。

(隊長・中村 真)

第四十八回ウエストン祭 「山」人に会う楽しさ

信濃支部

ウエストン祭の前日六月四日、上高地に着いたのは午後四時すぎであった。本来なら峠越えをするのだが、仕事の都合上断念して、バスで上高地に入る。河童橋を渡り、宿舎のアルペンホテル

へ向かう途中、懐かしい先輩に出会う。「よお! 今徳本峠を越えて下りてきたところだ。天気もよかったし、最高だったぞ! じゃあ後でな」なんていい顔をしているのだろう。峠越え山行に参加できなかったことを悔しがりながらも、喜びにあふれる笑顔に出会えたことによって、自分の中のウエストン祭が始まった。

■六月四日午前五時、ウエストン祭記念山行は例年通り島々宿入り口の出発式で幕を開けた。田中弘美信濃支部長や安曇村助役の挨拶があり、全国から集まった参加者は、徳本のあの峠からの明神・穂高に心をときめかせるために、それぞれのペースで歩を進めた。毎年参加する人がいる。大層年配の人がいる。小さな子供がいる。老若男女年齢や性別、社会的地位や肩書きなどここでは何の意味もなく、誰でも登山を楽しめることを教えてくれる素晴らしい一日の始まりだ。この日、四五〇人が峠を越えたという。

夜、オープンしたばかりの村営アルペンホテルでの晩餐会は、本部からの藤平会長、松田前副会長をはじめとする役員や山研関係者、それに信濃支部員六十一名を交え、再開の喜びに大いに盛り上がった。食事や酒に満足し、話は尽きることがなかった。

■六月五日、午前四時に起き、梓川畔

を散策する。山々はくっきりと晴れ上がり、ウグイスやコマドリが鳴き、快晴のウエストン祭を約束してくれる。

午前十時、碑前祭は細井澄子支部員の司会で始まる。支部長の挨拶に続き安曇小学校児童により、献花が碑前に捧げられる。毎年繰り返される光景だが、子供たちは可愛く、祭のハイライトといってもいいだろう。エーデルワイスクラブの澄んだ歌声と梓川のせせらぎが、ウエストン碑と参加者を包み込む。藤平会長と安曇村村長の挨拶の後、鳥橋祥子支部員らが、尾崎喜八氏が第二十四回・昭和四十五年のウエストン祭のときに作った詩を朗読する。

*

ウエストン祭

まる一年後の六月のこの日待って都会を遠く山坂を越えて来て見ればありがたいかな、私の愛の上高地は、その姿、その美しさ、その品位、すべて去年と、いささかも変らない。

前穂も奥穂も北穂も焼も霞沢も

梓の谷も森も林も

厳として聳え涼々と流れ

新緑の雲に包まれて

そこに鳴りひびく小鳥の歌

小径をいろどる山の花

すべては憧れの夢さながらだ。

この再会を楽しみに働いた一年間それを思えば、今日の満足、



碑前で尾崎喜八氏の詩を朗読する

この喜びもひとしおだ。

旧友の顔や姿になつかしく見とれ新しい友と契りに集いに

老いた身も心も共に若やぐ

古くして新しい体験と感激との

これが本来のウエストン祭だ。

一年を待ち望まれたウエストン祭の

これが真の姿だ、本当の意義だ。

*

山に会う楽しさと、人に会う楽しさは、いつになっても変わらないということ、尾崎喜八氏は見事なまでに表現した。我々も同じ感激を二十四年後同じ場所で味わっている。知らず知らず心が透き通ってくる。時間とは何

か、場所とは何か。シジュウカラが鳴き、イワナが水面で光り、山は何も語らず、聳え立つ。

続いて松田雄一前副会長による記念講演が行われた。題して「ヒマラヤを越えるツルの渡り」話の素晴らしさに時間が足りないくらいだ。最後に氏は結ぶ。「山はただ登るだけでなく、鳥や植物など自然に親しむことによって、もっと楽しくなり、それが自然保護にもつながるのです」。山に登る喜び、人に会う喜び、自然に触れる喜び……。ウエストン祭は多くの喜びを与えてくれた。そしてまた「再会を楽しみに一年間働く」のだ。

(植松晃岳)

現地講習会

「自然エネルギー利用実用化の現状」

科学委員会

六月十八日、上高地山岳研究所と徳沢園で表題の現地講演会が実施された。これは山小屋などでの自然エネルギー利用の実情を現地で見学し、当事者の話を直接聞き、その意義や今後の見通しについて理解を深めることを目的としたものである。

十二時三十分、山研に集合し、曇り空の中を徳沢園まで歩き、十四時二十分から食堂で、同園経営者上條敏昭氏

(本会会員) から話を聞いた。

①太陽光発電システムの導入に当たって、技術面では特に問題なかったが、行政面では手続きに苦労した。②導入規模とコストのバランスに留意した。③トイレ関係、常夜灯、カード公衆電話、非常灯など二十四時間使用する小電力設備に使用し、動力源やお客さんの多い時間の照明などはディーゼル発電に依存している。④水力発電は場所が離れている上に、本格的な土木工事になると経済的負担、役所との折衝など困難な問題が多く、保留している。

ついで、屋根にとりつけられた太陽電池パネルと電気室のバッテリーやインバータを見学した。

その後、雨がぱらつきはじめた中を山研に戻り、自然エネルギー利用の研究を長年続けてこられた神奈川工科大学名誉教授鳥居亮氏(本会会員)から、自然エネルギー利用の普及状況の推移と今後の見通しについて、次のような話があった。

①最初に本格的に取り組んだのは、穂高岳山荘において、昭和五十七年から風力発電、五十九年から太陽光発電の実用化試験である。②六十三年から、北アルプスや八ヶ岳などを中心に多くの山小屋で実用化が進んだ。その中心は技術的に容易な太陽光発電であった。③平成元年から、国の補助を受けた白

山と医療・中島道郎

1993年制定 UIAA 医療委員会
公認基準について(4)

第2編・登攀時における血液媒介
伝染病の人から人への伝播

第1章 衛生学的知識

まず、血液は危険度の高い感染症媒体である、と認識すること。血液は原則的に汚いものであり、どんな場合でも、血液(ばかりでなくその他の体液も同様である)には直接触れてはならない。もし触れた場合には、徹底的にこれを洗い流さないと危険である。とくに、皮膚表面が傷ついていた、皮膚病をもっていたりする場合、外敵新入防御機構が働かないので、絶対に血液や体液に直接触れてはならない。必ず使い捨て手袋を着用すること。

血液を介して伝染する病気の代表は、その感染機構の解明はまだ

不十分ながら、エイズとB型・C型ウイルス肝炎である。ただし、エイズはウイルス肝炎と比べるとその危険度はずっと低い。

一番よい防御法は消毒である。すなわち血液・体液で汚れた手はもちろん、その手が触れたものの表面はすべて消毒剤で拭拭する。現在のところ、器具表面消毒用にはアルデヒド*1か活性塩素剤*2、皮膚表面用には70~80%アルコールが有効とされている。

医療担当者は素手のままで傷の処理や血液に汚れた物品を始末してはならない。必ずWHO認定のラテックスないしビニール製の使い捨て手袋を着用すること。

ウイルス性伝染病の人から人への伝播は、こうして、ほぼ完全に予防できる。

*1: 2%グルタルアルデヒド、商品名: ステリハイド、サイデックス等。

*2: 0.5%次亜塩素酸ナトリウム、商品名: ピューラックス、ミルトン等。

馬山荘で大規模な(七十キロワット)実験が行われ、いろいろなデータ収集が三年間にわたって実施された。④山の上での実験は、非常に困難をとまなれないことが多かった。⑤最近数百ワット程度の水力発電の実用化研究に取り組んでおり、立地さえ適切であれば二十四時間発電可能なため、大変有効である。

展示されている太陽電池、超ミニ水力発電装置や関連の資料を見学した。参加者からは、経済性、耐用年数、関係法規などについて数多くの質問が出された。また、当日参加の白馬山荘の宮本氏、奥秩父三条の湯の木下氏から経験談も語られた。

そして、六時半から小倉常務理事の発声で乾杯し、懇親会を催した。参加者の自己紹介では大いに話が弾み、食後の語らいが遅くまで続いた。

翌朝は五時に起床したが、あいにくの雨の上に、焼岳、徳本峠など各自予定していた山行は全員中止にせざるを得なかった。

三水会三百回例会
記念山行・草戸山

三水会例会・現地集会在三百回を越えた。これを記念する山行が、高尾山の東、東京都と神奈川県との境界尾根上の一峰・草戸山(三六四メートル)で行われた。

ゴルデンウィークの最終日となった五月八日の日曜日、京王線高尾山駅に集合した三十六名は、九時に草戸山へと向かう。立ち並ぶ土産物店の間から山道に入れば、もう高尾山へ行く人たちの賑わいはない。すでにサクラは終り、新緑も青葉の季節となり、ところどころに咲くヤマツツジの花が際立つ。ホウチャクソウやチゴユリの花は地味でしおらしいところがい。

このコースはわりにアップ・ダウンがある尾根続きで、とても四〇〇メートルに満たない山に登っているとは思えないほどであった。歩行は順調にいて、予定より早く草戸山の頂上に着いた。眼下に城山湖を望み、その向こうに見える町並みは城山町や町田市、そして相模原市であらう。晴れていても五月の空、まして近郊の山、少し遠方は霞んでしまう。

全員がそろったところで、三水会発起人の一人であり名誉会員の坂倉登喜子さんの乾杯で、山頂のパーティーとなった。各自持ち寄った酒や嗜好品は並大抵の量ではない。オンザロック用の氷から冷や奴、カツオのたたきまで登場する。青葉と松魚とくれば時鳥だが、これは少々無理。そんなさなか、時鳥ならぬ松蟬(ハルゼミ)が突然頭上で鳴き出したのにはびっくりした。

これもまた初夏の季節ならではの、このパーティーに花をそえるものだ。ところで、三水会の例会・現地集会はよくぞ三百回も続いたものである。ここに至るまでの過程には、多難があったことだろう。発起人やこの会を支えてこられた多くの先輩のご苦労に感謝。そして、日本山岳会が存在する限り三水会が続くことを願う次第である。二時間を経過する草戸山でのパーティーは、全員のコーラスで終止符を打った。

十三時半、津久井湖へと下山開始。峰ノ薬師分岐までは歩きにくい木の階段の登り降りがあり、ほろ酔い? 機嫌にはこたえた。分岐点から関東ふれあいの道を峰ノ薬師へ。峰ノ薬師で少憩。参道を下り津久井湖畔に出て、三井大橋を渡った少し先のバス停からバスに乗り、JR橋本駅へ。駅前解散。無事に記念山行は終了した。(平戸孝夫)

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をご報告します。

山形支部
蛤岳清掃登山・
霧の中の花街道

毎年実施されてきた清掃登山が六月二十六日、蛤岳で行われました。参加者は大橋支部長他、加藤、梅津、菊池の四名という、いつになく寂しいものでしたが、ゴミらしいゴミは皆無、清掃登山、変じて清爽登山の一日となりました。

目的の山は「蛤岳一三四メートル」宮城県のほうでは山形神室といっている山で、新雪に染まる蛤に似た姿は譬えようがないほど美しく、古来から地元の人々に「季節の到来を教えてください」の「蛤岳」として愛されてきました。

笹谷峠からカケス岳を経て、現在は

トンガリ山といわれる無名峰から蛤岳までの三時間は文字通りゴミ一つない花に埋もれた登山路となりました。峠からカケス岳までは一気に立ち上がる急坂、カケス岳から蛤岳までは高原のブロンナードといつてよい、見晴らし抜群の小道をたどります。

今を盛りのサラサドウダンの群落を縫う登路は、ベニバナイチヤクソウ、ミヤマカラマツ、ハクサンチドリ、ゴゼンタチバナ、ウスユキソウ、アズマギク、タカネニガナ、シロニガナなどいろいろとられ、ナンブアザミ、シシウド、まだ蕾のヤマユリを添えながら、ミヤマナギが綿毛を吹き出し、ハクサンシャクナゲが咲き誇り、裸地ではこれから花季を迎えるアサギリソウのさわやかさに目を奪われました。

山背の雲がぴたり山肌に張りつく一日、まさにゴミのない霧の中の花街道をたどった心の清掃登山でした。

(菊地俊彦)

京都支部
今西錦司元会長の
記念碑完成

京都支部が今西錦司元会長の三回忌に合わせて京都・北山に建設していた記念碑(写真)が完成、六月十二日に現地で開催式が行われた。

今年もさくらで会いましょう

当日は、地元京都のほか大分、岐阜、石川などから約一〇〇人が参加した。

支部会員の僧侶による読経の後、関係者、来賓などが挨拶、同じく会員らのリコーダー、チェロの合奏に合わせた「雪山讃歌」の大合唱、手作り料理による祝宴と盛り上がった。

目が不自由にもかかわらず、手を引かれて、四十年ぶりに北山を訪れたという国立民族博物館前館長の梅棹忠夫さんは

「北山は京都の登山、探検の原点です。ここに今西さんの記念碑ができたのは、大変嬉しい」と挨拶された。

記念碑は砲金製(縦五十五センチ、横四十三センチ、厚さ四センチ)の今



西さんの笑顔のレリーフを、自然石にはめ込んだだけのもので、自然環境を損なわないように配慮した。

記念碑のある直谷(すぐだん)は鴨川の上流で、近くに貴船山や魚谷山がある。車を使い直谷の林道経由なら徒歩約十分、叡山電鉄利用なら二ノ瀬か貴船口下車、滝谷峠経由で徒歩約二時間半。

記念碑建立に際しましては、多くの会員からご協賛をいただき、ありがとうございます。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。(四手井靖彦)

信濃支部
大町市制四十周年記念
日本山岳画協会展

去る七月二十三日、長野県大町市において、標記の記念事業の一環として日本山岳画協会展が大町山岳博物館の主催で開かれた。

ことさら暑い今年の夏の陽射しを軒端に避けながら、大町市教育長の挨拶や来賓の挨拶、テープカットなど一連のセレモニーが行われた。観賞の部では、それぞれ絵筆をとった画家たちが、

鑑賞者の目をより楽しませるよう、展示されている自分の絵について逐一説明を行った。

昭和十一年協会創立以来、本会と歩調を合わせるように活動してきた伝統のある山岳画協会である。藤江幾太郎、江村真一、牧潤一、関戸紹作、岩切峯泰、上田太郎といった本会会員でもある人々のほか、山岳雑誌などで絵筆を振るっているおなじみの画家たちが何人も加わっている。

絵の観賞がすんだあと、席を移して懇談会が開かれたが、乾杯の音頭をとった田中信濃支部長のほか、はるばる東海支部などからも参加した会員の顔なども散見された。大きな体で小さなハーマニカを巧みに吹きまくる山岳画家・牧潤一氏の余興の合間に挨拶した日本山岳写真協会の赤沼淳夫氏は、カメラの普及により誰もが山岳写真家になれる今、山岳画家の存在は貴重であるといった趣旨の話には、山を愛する画家たちも共感を抱いたのではなからうか。

退館するとき、切れ目なく次々と訪れる入館者の群れと、焼けつくような暑さのため白っぽくなった蓮華岳、槍ヶ岳、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳が筆者の目に飛込んできて、この年の夏の盛りを感じさせた。

(岡沢祐吉)

海外の山

ヒマラヤは五十歳代の時代

江本嘉伸

もう四十四年も前のことなのか、と思う。「人類最初の八千メートル峰」をねらった、モリス・エルゾグ以下屈強な山男たちが、フランスを発するにあたって目標としていた山は、二つあった。ご存じのアンナプルナ(八〇九一メートル)と、隣のダウラギリ主峰(八一六七メートル)である。

現地にはいつて偵察の結果「難しすぎる」とエルゾグたちが見切りをつけたのは、ダウラギリで、彼らは以後アンナプルナに転じ、登山史に光を放つ成果を上げたのだった。

政治的理由で外国人が入れなかった中国チベット領内にあるシシャパ(八〇二七メートル)を除けば、八千メートル十四座のうち、最後まで登られなかったのは、結局、このダウラギリだった。北東稜からスイス隊が登頂に成功したのは、エル

ゾグたちの挑戦から十年後、各国の七隊が敗退して後の一九六〇年になってからだ。

その「かつて最も困難だった」ダウラギリに向かって日本の「シルバートール・ダウラギリ主峰登山隊」が、八月末、出発した。

隊長の石川富康、五十七歳。隊員の遠藤京子、五十六歳。小西正継、五十五歳。渡辺玉枝、五十五歳。池田錦重、五十五歳。根津皖一、五十三歳。

九月九日、ベースキャンプを設営し、ネパール人協力員八人の力を借りて、十月五日、登頂の予定で、出発から帰国まで五十日のアドベンチャーだ。

隊長の石川は、愛知学院大学隊のメンバーとして、この五月、エベレスト南稜から八八四八メートルの頂きに立ち、日本人最高齢登頂者となったばかり。九一年九月には、チョー・オユー(八二〇一メートル)にも登っており、他のメンバーのうち渡辺、池田、根津の三人も、石川とともにチョー・オユーに立っている。

「世界第六位の高峰チョー・オユーの峰の頂きに、あるいは八千メートルの高所に、各隊員は様々な思いをこめて登山してきました。この体

験から、我々中高年齢者の登山活動が、世界の高峰に拡がってゆくのを感じながら帰国した」

今回、ダウラギリ主峰に向かうにあたって、シルバートールの面々は、このように書いている。あのダウラギリが、日本の五十歳代の男と女たちによって登られる日がきたのである。

心奥にヒマラヤへの憧れを抱きつづけていようと、四十歳代までは、どうしても仕事に全力投球せざるを得ないのが通常なのであろう。「人生八十年」時代にあって、最多忙な時間が過ぎてみると、五十歳はまだ少し若く、しかしそれまでよりは時間を作りやすい。

準備や現地での行動が、うまく進行しないことがあっても、「タートル(亀だから)」と、自分に言い聞かせる知恵も備えている。これまでのアルピニズムとは違った楽しみ方ができるだろう。

もう一人「還暦を期して」エベレストに向かった男がいる。エベレストビュー・ホテルを建てたことで知られる、あの宮原巍。シェルパに支えられて、本気で登るつもりだ。「タートル」は、新たな時流になっている。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



カット 中村あや

再び企業と環境保護

関塚貞亨

会報八月号の東西南北欄に石田稔郎氏が、自然保護随想五月号の拙稿「環境ビジネスへの期待」に、もの申しておられる。

具体的な指摘はないが「登山者の自然保護論ではない」といわれているようなので、私としては山岳の自然保護論の一環として書いたつもりであり、石田氏が誤解されたとしたら、文章が出来なかったわけで補足させていただくことにした。

まずフロンガスの問題、オゾン層が破壊されれば、殆どの生物は再び海へ戻らなくてはならない。人間が生き残ったとしても、宇宙服を着て山へ登りますか。

次の化石燃料の枯渇に伴う将来の省エネ技術と発電効率の向上は、山岳の

環境、景観に大きな影響がある問題だ
と思う。

数年前、丹水会の古谷さんから「西丹沢に高さ三〇〇メートルの鉄塔を連ねて高圧線を敷く計画がある、山岳会として反対してもらいたい」という要望があった。首都圏の膨大な電力需要を賄うため、裏日本の発電施設から東電管内の消費者に送るための送電線建設計画であり、送電線施設の代替え計画も出しにくいこともあって、残念ながら要望を見送ったことがあった。

今夏の猛暑で、首都圏の電力消費量は史上最高、と伝えられた。今夏クーラーを使わなかった首都圏在住の会員が、どのくらいいたのであろうか。要望を見送ったとき、これは将来、化石燃料が乏しくなったとき電力を始めとする省エネ技術の発達と、太陽電池その他の小規模発電の発展に期待する以外にない。そのとき、日本海側から首都圏への送電線が不要になる、と考え

たわけである。

また自然保護協会、HATJなどNGOの環境問題への偉大な活動には、企業の物的、技術的な援助が必要である。五月号の拙稿は、企業は悪、といわれる筈に、別の見方を示唆しただけで、反論したつもりはありません。拙稿を山に無関係と断じられた石田氏が、新聞の経済欄を読めば「企業の環境ビジネス」は十分にわかる、とは信じられない。

木暮先生追悼小集会と先生の絶筆

川崎精雄

木暮先生がお亡くなりになった昭和十九年に、霧の旅会はいち早く『霧の旅 木暮先生追悼号』を出した。戦時で会誌中絶していたのに、これは早業であった。ガリ版印刷一八〇ページ、表紙題字・尾崎喜八、表紙絵・ナガバモウセンゴケは塚本閑治、まとめたのは松井幹雄亡き後働いた柴山（安田）登茂次だった。

私は柴山に追悼号を予約していた。そして同年十一月十八日に、木暮先生追悼小集会が立川の日本鋼管錬成道場で催された。何故そんな場所で開催されたかというと、戦争熾烈の最中で、場所

も食物も得られない状態だった。幸い会員吹原不二雄が日本鋼管社員で、その錬成道場へはいくらか食品配給もあったから、場所ともどもOKというわけだった。空襲を案じながら、暗い省線電車で立川まで足を運んだ。

灯火管制下の錬成道場に集まったのは私のほか、柴山登茂次、吹原不二雄、田口三郎助、桜井稔、神奈川甚吉、神谷恭、山崎金次郎、尾崎喜八、松本熊次郎、野口末延の十名で、霧の旅会か日本山岳会かその両方に籍を持つ人たちだった。私をこの会合に誘ってくれたのは、柴山が尾崎か神谷かだが、思い出せない。私はこの時、前記追悼号を持参した。尾崎が巻末余白に「木暮先生追悼小集会 昭和十九年十一月十八日 於立川日本鋼管錬成道場」と墨書してくれ、全員が署名してくれた。私以外の人が追悼号を持参したかどうかは覚えていない。

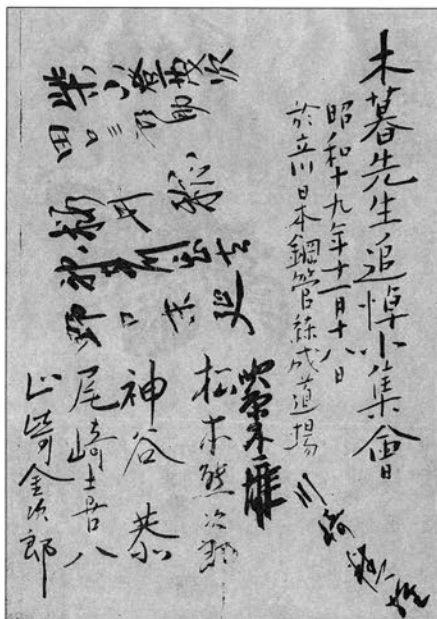
さて、追悼号には先生の肖像や描かれた絵「山どよむ」の扇面などが巻頭を飾り、本文に「絶筆」がある。巻頭の写真などは『山の憶い出』でも多くの人の目に触れるが、この「絶筆」はそうでもない。私はこれを書き写して、会員諸氏に知ってもらおうと思っただ。ガリ版であり、紙も古びたので写しづらかったが、間違いはないと思う。本文末に掲載したのがその「絶筆」で

あるが、先生が最後の最後まで仕事と山を思っておられた姿が彷彿として、頭が下がる思いがする。

本稿を書く途中、ふと気付いて山岳会に問い合わせると、追悼号の復刻が書店にあるという。些か骨折り損の気もしたが、書架にあっても誰も読まなければ意味がない。『木暮先生追悼号』という冊子があり、それに先生の絶筆が載っていること、山岳会の記録に恐らくないと思う『木暮先生追悼小集』が戦時下であったこと、そこに集まった山岳会の人たちは皆故人となったので、その署名をここに再現してもらえばよいこと、などを考えて本稿を提出する。敬称略(一九九四・六・三)

【絶筆】

どれほど、すきな仕事に熱中してあとから、それに全く心を奪はれてゐた



「霧の旅 木暮先生追悼号」に残された署名

物に応ずる如く、懐しい姿を眼の前に頭はしてくるのだ。山の幻想は悩ましいほど楽しい。渾沌の闇は明けて、夜明の光が訪づれ、天は澄み地は固まり、大地の偉大なる力は、一は水平に、一は垂直に、

と考へられる様な時でも何かの機縁で隙ありとも見えぬ闇室の中へ一條の閃光が忍び込むやうに、或は又天外より飛んでくる宇宙線から生れた中間子が地面の中へ入って行くやうに、不意に思ひが山にはしることがある。

山は心のふるさとだ。山に登る誰もがさういふ。その山が放射する執拗な電波は、幸福な山の囚人が仕事に張り切った心の蜘蛛の糸ほどの弛みも見のがさず、すぐさま、ぼんと肩を叩くにも似た軽い一触をあたへる。電撃的ではあるが、軽い、極めて軽い一触だ。その軽い一触に、ふるさと恋ふる心の鋭敏な耳は、「山を忘れるな」かう呼び懸ける親しい挨拶の囁きを感じて、間髪を容れず思を山に馳せるのである。だからこそ、かねてその事あるを知って待機姿勢を持してゐた山は、響の

自然保護随想

『夏三題』

尾瀬、霧ヶ峰、上高地

関塚貞亨

◆尾瀬の食事が変わった

近所の人に案内を頼まれて、七月十七〜十八日に尾瀬ヶ原から尾瀬沼へ通り抜けた。

尾瀬ヶ原はワタスゲが終りニッコウキスゲがちらほら、という時期だったが、大江湿原はキスゲが満開だった。それにしても「花の数が少ないなあ」と感じながら歩いてきた。宿泊は見晴らしの第二長蔵小屋

だったが、夕食のお菜が見事だった。主菜は里芋、人参、こんにゃく、菜など薄味で煮たもの、焼き魚、野菜サラダのドレッシングは油を使わない和風のもの、というように手のこんだものだった。

最近の山小屋の食事といえば、海老フライ、ハンバーグなどが定番だったが、油で汚れた食器は洗剤を使わなければならず、水の汚染が問題となっていた。その点で長蔵小屋の食事は、水洗いだけできれいになる

わけだ。平野紀子さん、やるね!

◆ニッコウキスゲ

見事な花のじゅうたんが見たくて七月二十七日に霧ヶ峰の八島湿原から車山を歩いた。色鮮やかなシモツケソウの群落は見事だったが、お目当てのニッコウキスゲは殆ど見当たらない。

早い梅雨明けと猛暑のせいで、キスゲの満開は終わったのか、と思っていたら、車山に向かう途中で会ったレンジャーの人が「今年は昨年の冷夏のせいで、ニッコウキスゲは殆ど咲かなかった。しかし来年は大丈夫です。原いっぱいに見事に咲くでしょう」とのことであった。尾瀬のキスゲが少なかったのも、昨年の冷夏のせいだ。

◆三本槍が折れた

八月三日の上高地、日帰りの観光バスも少なくて、釜トンネルから駐車場までの渋滞もなく、スナナリ入ることができた。上高地は、若者の姿が目立っている。

ウエストン碑の前で、霞沢岳を見あげると、例の三本槍の真ん中の槍が変だ。双眼鏡で覗くと槍の上部が折れて、向こう側の木の梢が覗いている。三年前の六月のことだそう。どこかに報告が出ていたかしら。

図書紹介



カット 中村あや

芦安村・編
『芦安村史』

南アルプス白根三山をめざす登山者にはおなじみの芦安村が、四年近くの歳月をかけて村史を完成した。芦安村は、代表的な溪谷型の山村である。一本の河川と川沿いの道路が、村と外界を結ぶ唯一の通路であるが、この土地に人間が住んだ歴史は、古く弥生時代にさかのぼると推測されている。

過去、林業が産業の大部分の村であり、林業の衰退で人口の流出が村の重要問題となった。現在放置状態にある森林の機能と生産性の向上が急務とされ、南アルプスと温泉と民俗的施設を観光立村の柱として、村の活性化を図っているという姿勢が、この村誌の随所に見受けられる。

第十三編に南アルプスの登山史が記述されているが、この村の地理的な宿命を感じさせる。やはり南アルプスの

麓の山村なのである。

山梨県芦安村刊 B5判 二二六ページ
（茂見 猛）

江本嘉伸・著

『西藏漂白 上・下』

雑誌「山と溪谷」に二年にわたって連載され、このほどようやく上下二冊が揃った。上巻から一年以上経ての出版は、著者がより完成度の高いものを目指した結果だろうが、書店には下巻だけしかなく、後半から読み始めるという結果になった。

それはさておき、本書は十九世紀末から半世紀の間に、潜入という方法でしか入国できなかったチベットに入った十人の日本人、能海寛、寺本婉雅、河口慧海、成田安輝、矢島保治郎、青木文教、多田等観、野元甚蔵、西川一三、木村肥佐生について、彼らが遺した著作、報告書、資料に加え、関係者の証言と著者自身のチベットでの経験を踏まえて構成した、日・西交流史ともいうべきもの。

私たちは彼らの個々の著作についてすでにお馴染みではあるが、それらからは知ることができなかったチベットの、あるいは彼ら相互の関係が、もつた糸を解きほぐすように明らかにされていく。しかも個々の著作からはう

かがい知ることのできない人間性、例えば慧海の意外な側面などが浮き彫りにされて興味深い。本書を読んだ後で、改めて慧海の『チベット旅行記』を読みなおしてみるのも一興だ。

上巻／一九九三年三月 一三九ページ 二、八〇〇円 下巻／一九九四年四月 三〇五ページ（付年表）
三、〇〇〇円 共に山と溪谷社刊
A5判 （泉 久恵）

史占春主編、成都地図出版社・中国登山協会共同編集

『中国登山指南』

本書は中国で出版された本としては珍しく、鮮明なカラー写真、地図をも入れた山の紹介書である。中国の山に關しては、従来この種の情報が極めて乏しかっただけに貴重な資料になる。

八〇〇メートル級九座をはじめとする四十四座について、それぞれに中国語と英語の解説にカラー写真、概念図、地図（多くは十五万分之一で二〇〇メートル間隔の等高線入り）が添えられている。

とはいえ、一座につき二〜四ページ程度のスペースの中に前記の内容を盛り込んでいくから、中文、英文の解説がそれぞれ一ページ前後であり、山によつては半ページ程度にすぎないのは

10万分1 中国山岳地図

中国科学院蘭州氷河凍土研究所制作

◆チョモランマ◆シシャバンマ◆クングール〜ムスターグ・アタ◆チョゴリ（K2）以上4種カラー10万分の1、英文。サイズ各々750×520mm。1種類の定価各1,500円 190円（2枚以上の御注文も千代同額）

祁連山脉地図70万図（全山系）と25万図（各山城）2枚組、中文色刷。定価2,000円 240円（2枚以上及び10万図と一緒にの御注文も千代同額）

申込先 中国地図研究会

郵便振替口座 00160-0-576537番

問合せ 電話0424-92-3965（夜及び日曜・渡辺）

物足りなく、残念である。その中では簡単ながら登頂の記録についても触れられており、多くの日本人の名前が見える。ただし発行が昨年十月なので、ナムチャバルワ、皇冠峰は未踏峰になっている。

一九九三年十月 成都地図出版社刊
A5判 二二〇ページ（南川金一）

金子民男・著

『フランシス（フランク）・キングドン・ウォード』

現在の地球上で最も知られていない場所の一つは、ヒマラヤ山脈がインドネシア半島のほうへ向きを変えるあた

ている。

三、「図書紹介」の原稿について

して訂正します。

印刷株式会社 双陽社

会務報告

七月定例理事会

日時 七月十三日(水) 十八時三十分
二十時十五分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、嶋原副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、南川、伊藤、水野、堀井、渡邊、中川、山本、大谷各理事、川崎監事、齊藤、湯浅、宮下、重廣各常任評議員

【委任】中村副会長、片岡、松浦、南井、溝口各理事、西村、神崎各常任評議員

議事に先立ち、会長から連絡委員会議事録について注意があった。

◆議事

【審議事項】

一、「九四五〇型パソコン」の貸し出しについて 小倉

桜門山岳会エベレスト一九九五登山隊から貸し出しの要請があった。承認

二、「山岳」掲載文の転載要請 小倉
悠々社刊「雪の谷・山の声」(高見和成著)に「山岳」第八三号掲載文の転載許可要請があった。承認

三、自然保護全国集会について 大森
九月十七日(土)、十八日(日)に

山梨県巨摩郡早川町で開催する。承認
四、映画と講演の会の名義後援の要請について 小倉

群馬県山岳連盟からサガルマータ南西壁冬期初登攀(一九九三年十二月)を記念して、英国からクリス・ボニントン氏を招き「映画と講演会」を開催するにあたり、名義後援の要請があった。承認

五、「山岳」掲載写真の転載要請について 小倉

山と溪谷社から「山と溪谷」八月号大雪山国立公園十周年特集に「山岳」第四六、四七号掲載写真の転載許可の要請があった。承認

【報告事項】

一、マカール峰登山隊一九九五 重廣
(1)七月五日から事務局を開設した。
〒一〇三 東京都中央区日本橋小舟町
七番二号・読売日本橋別館五階
TEL 〇三三二四九一五八六
FAX 〇三三二四九一五二六
事務局員 滝沢ちよ子(会員番号一〇三四八)

勤務時間 十時～十八時
(2)募金委員会(事務局長・石橋正美/局員・井野千恵子)は趣意書、計画書、募金振替書の作成に入る。

二、ルームのリフォーム 中川
会議室、事務室等の移転は七月十六日、電話の移転は十八日。したがって

事務局は十八日から一〇四号室で行う。
3、女性同好会「山げらの会」が発足した。 小倉

三、重複図書頒布および図書室の使用について 水野

「山」五月号で広報し、申し込み多数につき抽選で処理した。収入は本会雑収入に入れた。まだ若干の重複図書があり、秋までに整理がすめば再度実施したい。

図書室の使用について、読書者がいるのに会合を行う者がいる。月曜日以外は控えること。

古参会員から蔵書の買取り方について問い合わせがあるが、どうするか。寄付の場合は、重複本の事例と同様の処理が認められれば、会にとっても都合なので、今後検討する。

五、スケジュール表について 中川
九十周年の記念式典が各ブロック別に決定してきている。開催日の重複が予想されるので、理事の方々にはこの先二年分くらいは共通の表でチェックができるようにしたい。表は九月理事会までに作成したい。

六、自然保護専門委員会 大森
地球環境基金の支給(昨年度と同額)が内定。「山の自然学入門講座」の参加登録は一八〇名。さらに増加の見込み。七、「山岳」について 南川

第八九年(一九九四年)編集計画を決定し、九月一日印刷所入稿、十一月納本予定。

八、山研について 大倉
六月三十日、自転車振興会の書類審査が行われた。

九、第二回青登懇の計画 村井・山本
来年の第二回の企画について、問題提起、内容など、次回理事会で検討をお願いしたい。

【委員会報告】

●青年部 谷川岳合宿・成溪小屋(六月十一～十二日)、キルギスタン最終打ち合わせ(六月十五日)、加盟大学山岳部監督会議(六月二十三日)、愛知学院大エベレスト南稜報告会・本郷講師(七月六日)、学生部、指導、高所、海外、青年部打ち合わせ会(七月八日)、旧青登懇OBとのビール懇談会(七月十五日)

●総務委員会・集金委員会 若葉会山行写真交換会(六月二十七日)

●リフォーム委員会 六月十日、二十四日、内装の詳細決定、七月十六日、ルーム引っ越し。

●図書委員会 第二回「山日記の一生」と題して講演会を予定。講師は松丸秀夫会員、茗溪堂からも出席をお願いする。

●自然保護委員会 本年度の全国集会は九月十七、十八日、山梨県早川町で開催。テーマは「山の自然を考える」

(富士山、南アルプス、各地の山の状況を語る)

●自然保護専門委員会 六月十一・十二日、および七月一・三日に上高地「山研」で自然インテグレーション・リサーチを実施。六月二十五日、新参加者を含めて「山の自然学入門講座」を行った。七月十一日現在、新規参加者は四十名、さらに増加しつつある。

●フィルムビデオ委員会 (1)六月二十五、二十六日、八ヶ岳黒百合平で撮影会 (2)会報「山」八月号に年次晚餐会開催の写真展について公募の原稿の掲載手続きをした。

●資料委員会 (1)会員武井清画伯寄贈の絵画「甲斐駒ヶ岳」は七月十七日、山梨県白洲町で受領の予定。(2)故廣瀬潔会員所蔵の用具類について、松村潤会員を通じて寄贈の打診があり、七月八日広瀬宅を訪問し、寄贈の内諾を得た。用具類は昭和十年、故深田久弥氏と富士山頂からスキー滑降した際のスキー板、レルヒ大佐の日本におけるスキー導入時期のスキー板、三本爪のアイゼンなどがある。八月末に現品を受領の予定。(3)ナムチャバルワ峰登頂写真を滋賀県ダイニックスストローパークに貸し出していたが、六月中旬松本アルプス山岳博物館に返却されたので、現品の確認と寄託の手続きを取った。

●科学委員会 (1)現地講演会「自然エ

ネルギー利用実用化の現状」六月十八日に上高地山研および徳沢園で実施。参加者は二十名。(2)マッキンリー気象観測機器設置登山隊報告 中村進隊長以下八名は六月四日成田を出発し、所期の目的および全員登頂を果たし、六月三十日帰国した。

【新入会員承認】
松本久子他二十二名。

ルーム日誌

7月	フォトビデオクラブ
1日	連絡委員会
4日	図書委員会 アルパイン・スケッチクラブ
5日	青年部
6日	学生部
7日	海外・青年・指導各合同委員会
8日	アルパイン・スキークラブ
11日	二火会 科学委員会
12日	理事会
13日	学生部
14日	青年部
15日	総務委員会
16日	連絡委員会
22日	連絡委員会
28日	連絡委員会

7月来室者423名

INFORMATION



◆シンポジウム「山と疲労」

日時 十一月十九日(土) 午後一時半～五時
科学研究委員会・医療委員会

場所 青山学院大学総合研究所ビル11階19号会議室(渋谷駅から青山通りを徒歩十分。正門を入りすぐ右側のビル)

会費 一、〇〇〇円(予稿集代他)
演題と講師

一、中高年の高所トレーニングと登山における疲労
日本山岳会会員 貫田宗男氏

二、登山中に起こる疲労の種類とその対策
国際武道大学 山本正嘉氏

三、スポーツと疲労
聖マリアンナ医科大学 武者春樹氏

四、疲労回復のためのエネルギー補給
慶応義塾大学スポーツ医学センター 大西祥平氏

五、疲労と遭難(行動科学の観点から)
日本山岳会会員 千葉重美氏
六、パネル討論

●問い合わせは科学研究委・高橋詢へ。
◆山の本シリーズ(第二回)

日時 十月十一日(金) 十八時三十分
場所 日本山岳会会議室

演題 「山日記の一生」
講師 松丸秀雄 坂本矩祥

◆自然保護随想へ投稿を!

自然保護随想欄は自然保護委員会の専属欄ではありません。ご存知のように会報は一般に開放されています。

今まで、誤解もあって、投稿がほとんどなく、穴を開けないために自然保護委員会の原稿に偏っていました。自然や環境に関係ある建設的なエッセイの投稿を歓迎します。ただし、原稿は十六字詰め五十行程度。囲み記事のため、長過ぎる場合は当方で趣旨を損なわないように削減します。ご了承ください。

●原稿送付先

〒二二一 横浜市神奈川区三ツ沢下町九一十四 関塚貞亨宛

◆重複本の会員頒布

会報五月号(N0五八八)の好評に続き、再度、図書室にある重複本の一部を希望者に頒布したいと思います。

図書管理委員会

頒 布 図 書 目 録

書 名	著 者 名	頒布価格	出 版 社	出版年
1 岩登り術 (カバーなし)	藤木九三・著	7,000円	RCC事務所榎谷徹蔵	1925
2 アルプス傳説集 (箱つき)	山上雷鳥・著	2,000円	黒百合社	1932
3 エヴェレストの東 (カバーなし)	E・ヒラリー・著／藤木九三・訳	1,000円	ベースボールマガジン社	1956
4 山岳省察 (カバーなし)	今西錦司・著	1,000円	弘文堂書房	1940
5 槍・穂高・岩登り	藤木九三・著	3,000円	木星社書院	1931
6 日本山嶽史 (地図つき、前回頒布分より傷、汚れが少ない)	高頭式・編	7,000円	博文館	1906
7 山嶽巡禮 (カバーつき)	北尾鍬之助・著	1,500円	梅津書店	1919
8 尾瀬と日光 (山溪選書№3、カバーなし)	武田久吉・著	1,500円	山と溪谷社	1941
9 雪の祭典 (第3刷)	高橋喜平・著	1,000円	明玄書房	1954
10 祖母嶽	百溪祿郎太・編	1,500円	百溪祿郎太 (私家版)	1925
11 ペテガリ岳遠征記	小島六郎・編著	2,000円	サン書房	1948
12 黒部 (初版、地図なし)	冠松次郎・著	4,000円	第一書房	1930
13 岩壁登高	小林隆康・著	3,500円	博山房書店	1942
14 初登攀行 (箱つき)	松本龍雄・著	800円	あかね書房	1966
15 雪と岩	G・レビュファ・著／近藤等・訳	1,000円	新潮社	1961
16 阿蘇：北田正三遺稿集	北田正三・著	1,500円	北田春子 (私家版)	1960
17 山へ入る日 (第5刷)	石川欣一・著	1,000円	中央公論社	1929
18 北方の植物	館脇操・著	1,000円	アルス	1944
19 大雪山と阿蘇 (箱なし)	沼佐隆次・編著	1,500円	北海道廳景勝地協会	1935
20 ヒマラヤに挑戦して (箱なし)	P・パウアー・著／伊藤愿・訳	2,000円	黒百合社	1931
21 谷川岳研究 (再版、カバーなし)	長越茂雄・著	2,000円	朋文堂	1955
22 El Ecuador : エクアドル・アンデス遠征報告書1961 (カバーなし)	早稲田大学探検部・編	1,500円	早稲田大学探検部	1963
23 白頭山：京都帝國大學白頭山遠征隊報告 (並装、箱なし、汚れ、傷みあり)	今西錦司・著 (代表)	1,500円	梓書房	1935
24 Modern Painters Vol. 4	Ruskin, John	2,000円	J. M. Dent & Co.	
25 Mountain Craft	Young, G. W. (ed.)	1,000円	Methuen & Co. Ltd.	1920
26 South Col : One Man's Adventure on the Ascent of Everest 1953 (初版)	Noyce, Wilfrid	1,000円	William Heinemann Lt	1954
27 Climbing the Fish's Tail (初版)	Noyce Wilfrid	1,000円	William Heinemann Lt	1958
28 The Ascent of Everest (第3刷)	Hunt, John	2,000円	Hodder & Stoughton	1954
29 Everest 1938 (第2刷)	Tilman, H. W.	1,000円	Cambridge Univ. Press	1948
30 The Fight for Everest 1924	Norton, E. F. et al.	5,000円	Edward Arnold & Co.	1925
31 The Assault on Mount Everest 1922	Norton, E. F. et al.	5,000円	Edward Arnold & Co.	1923
32 Everest : The Unfinished Adventure (初版)	Ruttledge, Hugh	5,000円	Hodder & Stoughton	1937
33 Everest 1933 (初版)	Ruttledge, Hugh	3,000円	Hodder & Stoughton	1934
34 Mount Everest : The Reconnaissance 1921	Howard-Bury, L. C. k.	5,000円	Edward Arnold & Co.	1922

日本山岳会報 山 592 号

1994年 (平成6年) 9月20日発行
 発行所 社団法人日本山岳会
 〒102 東京都千代田区四番町
 5-4 サンビュウハイツ
 四番町
 TEL 東京 (03) 3261-4433
 振替口座 東京3-4829
 発行者 藤平正夫
 編集人 伊藤 敬
 印刷 株式会社 双陽社

書籍は図書ラベル、蔵書印、廃棄印
 および受入印 (ペン記入) つきです。
 希望者は、十月十日 (必着) までに
 希望書名と返信用住所を明記の上、往
 復はがきで図書管理委員会まで申し
 込みください。混乱を避けるため、希
 望図書は一人五冊までとしますが、は
 がきは一枚で結構です。
 応募者多数の場合、当委員会では抽選
 の上、結果をはがきでお知らせします。
 電話での問い合わせはご遠慮ください。
 なお、書籍発送は十月二十日ころ、送
 料は各自負担です。 (水野 勉)

■会員異動
 ▼退会 柳沢一男 (二四四六) 6・7
 ・31 大倉寛 (三四五三) 6・7・8
 ▼改姓 古郡弘子 (九六二八) ↓内藤
 弘子 ▼終身会員 横江一郎 (四〇四
 七) 松田雄一 (四一一一) 川崎
 (五五三三) 佐々木民秀 (五七四八)
 岡田光行 (五九九九)